

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	ブルナ ルカーシュ
論文題目	日本近代文学におけるゴーリキーの影響に関する研究—明治・大正期の文学を対象に—
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、北原白秋を取り巻く「トスカ」という情念の分析を出発点とし、二葉亭四迷の訳した「ふさぎの虫」の存在を媒介に日露戦後文学を論じた修士論文をベースに、それを多角的に発展させ、ロシアの作家ゴーリキーが日本の近代文学に与えた影響を丹念に辿る体系的作業を試み、従来の成果を高めることに成功した論文である。その成果が、昭和の初めまでを視野に入れた、広範な論文としてここに結実したことは、注目に値する。ゴーリキーの影響は、近代文学にさまざまな形で現われているが、その思想は二葉亭四迷を皮切りに、石川啄木、更には小林多喜二にも及んでいる。現在では、読まれる機会が少なくなったゴーリキーだが、明治期・大正期ではその存在は大きかった。その作品の影響がどういう文学者のどういう作品に明らかであるかを丹念に辿ることは、日本の近代文学の歩みを考えるにあたって忘れてはならないことである。本論文でまず特筆すべきは、これまでの研究でほとんど触れられていなかった、内田魯庵・白柳秀湖・三島霜川・小栗風葉・宮嶋資夫・宮地嘉六などに与えた影響を、具体的な作品分析を媒介に明らかにした点である。ゴーリキー翻訳年表(1902-1923)など基礎的な資料面もしっかり整備されており、今後ゴーリキーと日本文学を考える時には、必ず参照される業績となっていよう。</p> <p>「序説 マクシム・ゴーリキーという作家」は、「第1章 ゴーリキー文学の影響に関する研究にあたって」「第2章 放浪者の運命、革命家の使命—マクシム・ゴーリキーの初期作品の特徴をめぐって—」の2章からなる。いずれも本論文の基本的スタンスを論じたものであり、従来ゴーリキーが単にプロレタリア文学との関係で論じられてきたことに対し、その造型された人物像や思想概念、感情の諸相など、さらに多くの側面において日本近代文学に影響を与えたとする。1902年(明治35)から1921年(大正10)の日本評論社出版部版『ゴオルキ全集』までを視野に入れて、関連する諸作品を丹念に分析していく。</p> <p>「第I部 日本におけるゴーリキー文学の初期受容」は、4章からなる。まず、「第1章 ゴーリキー文学受容史—初期移植から日露戦争後の隆盛期まで—」で、明治30年代を中心に、近代文学の質的飛躍が見られるこの時期の文学にどういったゴーリキーの影響が見られるかを論じる。以下、典型的なゴーリキー受容を3人の文学者の作品を通して探究する。「第2章 借用された題材、創作された趣向—内田魯庵「社会詩人」にみる〈労働者問題〉への視点—」では、内田魯庵の作品を扱い、「第3章 翻案「畜生恋」にみる白柳秀湖の思想—明治社会主義文学とゴーリキー—」では、従来白柳秀湖の創作とされてきた「畜生恋」が、ゴーリキーの短篇「二十六人と一人」の翻案であることを突き止め、「第4章 浮浪者の方言—風葉の「強き恋」と二葉亭の「ふさぎの虫」—」では、ゴーリキーの「マリワ」を訳した風葉の「強き恋」の方言使用の文体に二葉亭の翻訳が影響していることを、具体例を駆使して論じている。いずれも研究の死角となった時期や作家・作品を扱い、研究の鉄入れをした貴重な達成である。</p> <p>「第II部 日露戦争後にみるゴーリキーの影響」は、3章からなる。「第1章 三島霜川の最盛期とゴーリキー文学—「獣」としての人物、「藪の虫」の心境—」では、忘れ去られた三島霜川に照明を与えた貴重な達成である。「悪血」は浮浪者を描くが、そうした造型には、ゴーリキーの影響が強く見られるのである。「第2章 自然の「力」への憧憬、社会の「平凡と俗悪」への反逆—石川啄木「漂泊」にみるゴーリキー文学による感化—」は、啄木の小説「漂泊」を分析する。自己の境遇と心境に加え、ゴーリキーの読書体験がうまく作品に結実しているとする論旨は、この時期のゴーリキー受容の典型を示しており、興味深い。「第3章 木賃宿という舞台、放浪者という存在—小栗風葉「世間師」にみる実体験／読書体験の表現化—」は、風葉の代表作「世間師」の世界が、風葉の実体験とゴーリキーの世界から醸し出される放浪のイメージが合体したところから生まれたと指摘、新しい作品像を達成している。</p>	

「第Ⅲ部 「トスカ」と「ふさぎの虫」の表現史」は、2章からなる。「第1章 「ふさぎの虫」にみる二葉亭四迷の翻訳態度—「人生問題の研究」との関連にふれて—」は、二葉亭のゴリキー翻訳の代表「ふさぎの虫」を扱い、二葉亭の翻訳態度を分析した後、二葉亭のいう「人生問題の研究」が、そうした翻訳体験から成立していることを明らかにする。「第2章 日本近代文学にみる「トスカ」—文学概念、そして文学表現の軌跡を辿って—」は、近年注目されている「トスカ」概念を再考する、基本的な作業を試みたものである。明治の文学で、時折「トスカ」の語が見られるが、それが世紀末文学にとって大事な憂鬱な気分のことであることは、あまり知られていない。明治末にその語を特徴的に使ったのは、北原白秋だが、その使用例を綿密に辿り、小熊秀雄にまで及ぶ、一種の精神史を素描するのに成功している。本論文全体の出発点をうかがわせるような内容で、興味深い。

「第Ⅳ部 大正期におけるゴリキー文学の影響」は、3章からなる。「第1章 大正初期のアナーキストらとゴリキー—『近代思想』という環境と、大杉栄の思想をめぐって—」は、ゴリキーの影響のもと大杉の個人主義と反逆の思想が形成された事を丹念に辿ったものである。「第2章 宮嶋資夫『坑夫』にみるゴリキーの〈浮浪者もの〉の影響—石井金次の人物像の二面性を中心に—」は、大正の社会主義文学の代表作である宮嶋の「坑夫」を、従来のように単に社会主義思想からの関連だけで捉えるのではなく、ゴリキーの描く放浪者のイメージからも分析、この問題作の世界を十分に説明している。「第3章 実体験と読書体験との狭間—宮地嘉六の創作・評論にみるゴリキー文学の影響—」も、宮地嘉六という特異な作家の作品を材料に、宮嶋とも違う人間像を打ち立てたその文学世界を説明する。

「終章 小林多喜二—「超人思想」—ゴリキー—姉妹作「女囚徒」と「最後のもの」の生成過程をめぐって—」は、昭和期のゴリキー受容を見通す試論だが、多喜二の作品にどうゴリキーが関わるかを論じて、その後のプロレタリア文学におけるゴリキー像を考察している。「資料」として付された「翻訳年表」も労作であり、主な文献紹介や外国語訳一覧も、論文を支える基盤をうかがわせて、貴重である。

こうした達成は、留学生の業績として注目に値するが、論者のゴリキー観がもっと出てもよかったのではないか、個別の章は高い達成だがまとめの章があるともっと良いのではないか、有島武郎などを組み込むのも必要ではないか、演劇面でのゴリキー受容にも触れるべきではないか、といった要望も出て来る。二葉亭の仕事をさらに世紀末の不安の視点から見直すことも、この論文を更に生かすことにつながる、ということもあろう。こうした要望も出したくなるほど刺激的で、高度な達成であることは間違いない。

本論文は、ゴリキーの近代文学への影響を新たな視点で再構築しようとした試みとして見事な達成となっている。よって、審査委員会は本論文が、「博士(文学)」の学位にふさわしいものであることを認定する。

公開審査会開催日	2016年1月27日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	中島 国彦	日本近代文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高橋 敏夫	日本近代文学	
審査委員	早稲田大学政治経済学術院・教授	宗像 和重	日本近代文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	十重田 裕一	日本近代文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	鳥羽 耕史	日本近代文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	源 貴志	ロシア文学・比較文学	